

## 古関裕而の作品とその背景：「国民的作曲家」が織りなす「大衆性」に着目して

著者	増田 久未
雑誌名	東京音楽大学大学院博士後期課程 2019年度博士共同研究A報告書：《オリンピックと音楽》
ページ	75-81
発行年	2020-03-31
出版者	東京音楽大学
著者版フラグ	publisher
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1300/00001352/">http://id.nii.ac.jp/1300/00001352/</a>

## 古関裕而の作品とその背景

### ——「国民的作曲家」が織りなす「大衆性」に着目して——

増田 久未

## Compositions of Yuji Koseki and the background

Kumi MASUDA

キーワード：1964 年東京オリンピック 古関裕而 国民的作曲家 大衆性 音楽文化

### 1 はじめに

今回オリンピックと音楽というテーマで、オリンピックに関連する音楽を調べるなかで、1964 年東京大会の開会式行進曲オリンピックマーチを作曲した古関裕而に興味を持った。古関は、オリンピックマーチが代表作としてしばしば取り上げられるが、それだけでなく非常に幅広いジャンルで手がけた作品が多くあり、いまなお親しまれている曲も数多く見られる。古関裕而とその作品に関する書籍や批評ではしばしば「国民的作曲家」と謳われるが、なにをもって「国民的作曲家」と言われるのか。

本研究は、彼の作品とその作曲背景を見ていくことによって、当時の音楽文化がどのような時代背景により形成され、「国民的作曲家」としての古関裕而を生み出すに至ったのかを明らかにすることを目的とする。その導入として、今回は古関が取り組んだ作品のなかでもラジオ音楽とオリンピック開会式の音楽を対象とし、曲を取り上げながら作曲背景と照らし合わせ、古関の音楽の「大衆性」がどこに存在するかを探る。

### 2 古関裕而の生い立ち

まず、古関裕而の生い立ちについて簡単に説明する。1909（明治 42 年）年 8 月 11 日、福島市大町の呉服屋「喜多三」に生まれる（本名古関勇治）。幼少期より父親の影響でクラシック音楽、吹奏楽、日本の民謡などに親しんでいたようである。小学校のときの音楽の先生が自ら作曲をするだけでなく、生徒たちにも童謡を作らせるほど教育熱心だった。それが古関の作曲に熱中するきっかけとなる。市販の楽譜で五線譜を学び、やがて母親が卓上ピアノを買ってきて、さぐり弾きをするなかで音符がわかるようになる。商業学校で年に二回行われていた弁論大会に「音がでないと淋しいから音楽を入れようじゃないか」という話が出た。そこでハーモニカの吹ける人が募られ、古関含め数人が立候補し、ハーモニカバンドが作られた。バンドで演奏するために、それまで古関がコツコツ作っていた曲を合奏用に編曲し、大勢の前で披露した。1926（昭和元年）年、17 歳のときには「福島ハーモニカ・ソサエティー」に入り、ハーモニカ・バンドの指揮や作曲・編曲を古関が担当する。

こうして演奏、作曲の勉強に打ち込む幼少期、青年期を過ごし、商業学校卒業後も手本としていた『作曲法』の著者山田耕筰への助言も求めながら、独学で作曲を続ける。1929（昭

和 4 年) 年、自力で書き上げたバレエ組曲〈竹取物語〉が英国国際作曲コンクールで第 2 位となったのを契機に、日本コロムビアと専属作曲家の契約を結び、福島を離れ東京へと転出する。

### 3 古関裕而のラジオ作品

#### 3-1 ラジオ放送と古関裕而

非常に幅広いジャンルで作曲をしていた古関だが、ここからは中でもラジオ作品を中心に見ていく。

日本では 1925 年(大正 15 年)、日本放送協会(NHK、戦前は JOAK)が設立、ラジオ放送が開始された。1951 年に民間放送が始まるまでは、ラジオといえば NHK であり、庶民の娯楽の中心となる。

古関のラジオ音楽は、劇作家菊田一夫との出会いが大きく関係している。昭和 12 年、NHK ラジオドラマ《当世五人男》の音楽を依頼されたことがラジオ音楽に携わる契機となり、そこで古関は菊田一夫と出会う。古関が音楽を担当した代表的なものでは《ひるのいこい》《日曜名作座》などの番組テーマ、そのほか NHK ラジオ・ドラマ〈とんがり帽子〉(《鐘の鳴る丘》主題歌)〈さくらんぼ大将〉〈ジロリントン〉〈君の名は〉〈漫画西遊記〉〈由紀子〉などが挙げられる。このように古関は他にもラジオ放送に際し数多くの音楽を担当し、「放送音楽」の分野においてその貢献度が高く評価され、昭和 28 年 NHK 第 4 回放送文化賞を菊田一夫と共に受賞する。

#### 3-2 《ひるのいこい》

古関の代表的なラジオ音楽作品の一つに《ひるのいこい》が挙げられる。この番組は 1949 年に放送が開始される《農家のいこい》が前身となっており、1952 年から番組名を変え、《ひるのいこい》となる。番組のスタートは連合国軍総司令部(GHQ)の政策に関係する。敗戦後の日本の食糧難を解決するため、ラジオで最新の農業技術を広めようという意図のもと始まる。

古関が農家の昼休みを想定し作曲したというテーマ音楽は、次のように評される。「国民的作曲家に相応しく、喜び、悲しみを力いっぱいにつける解放性、ほのぼのとした素朴な自然情緒、民族舞踊のリズムに着目し、生の人間性の溢れる感情エネルギーをクラシックの格調のある健康的なメロディーにした」<sup>1</sup>。『古関裕而 うた物語』の作者である齋藤秀隆のところに、楽譜の有無の問い合わせが最も多くくる曲でもあり、日本各地で今なお愛される名曲であると言える。

《ひるのいこい》という番組は、その歴史を辿ると、日本の農林水産業と深く関わりを持つことがわかる。《ひるのいこい》では、最初は日本各地の「NHK 農林水産通信員」と呼ばれる農業協同組合・漁業協同組合の職員、農業普及指導員を務める県職員から提供された農業・漁業関連のニュースが中心であった。その後日本の農林水産業の変化により農家人口が減っていくにつれて、「NHK ふるさと通信員」と改称、内容も季節の話題、リスナーからの

<sup>1</sup> 菊池清麿『評伝古関裕而 国民音楽樹立への途』、p204。

はがき、投稿俳句を読む「暮らしの文芸」などに変化していく。2013 年度からは「NHK ふるさと通信員」の名称がなくなったことから、聴取者からのお便りに統一された。こうした番組の変遷をみることによって、日本の農林水産業の変化にともなう農家人口の減少との関わりも見えてくる。

### 3-3 《日曜名作座》

《日曜名作座》は、昭和 32 年 4 月～平成 20 年 3 月 30 日まで放送された NHK ラジオの人気番組である。放送当初は毎週日曜日 9 時 5 分～35 分まで、平成 18 年 4 月からは 11 時 10 分～40 分に番組時間が変更された。この番組は森繁久彌と加藤道子が 2003 年まで担当し、その後高齢の二人の体調を考慮してしばらく再放送となり、現在《新日曜名作座》となっているが、番組がリニューアルされてまでなお古関のテーマ曲をアレンジして使用している。《ひるのいこい》と同様、長寿番組として愛される番組の音楽を古関が生み出したのである。

### 3-4 《鐘の鳴る丘》

次に、NHK のラジオ・ドラマ《鐘の鳴る丘》のテーマ曲を見ていきたい。昭和 22 年 6 月頃、CIE (GHQ の民間情報教育局) の指令で、戦災孤児、浮浪児救済のキャンペーンのため、《鐘の鳴る丘》の放送が企画された。CIE からアメリカでもともと放送されていた 15 分という尺で製作するよう求められたが、日本語だと 15 分では短すぎるため、菊田はこれを断ったという。しかし、最終的には命令に従わざるを得ず、15 分で作成することとなる。

ドラマの内容は、孤児たちのためにホームを建てようと奔走する青年と浮浪児たちの物語である。テーマ音楽で合唱を担当したのは「音羽ゆりかご会」という、日本で最も歴史のある児童合唱団である。番組の放送は昭和 22 年 7 月 5 日第 1 回開始～昭和 25 年 12 月 29 日、第 790 回で完了した。

古関の音楽には Hammond オルガンが多く使われているが、ラジオドラマでは初めてこの曲で使用され、古関自ら Hammond オルガンを弾いていた。菊田一夫は遅筆で有名であり、原稿が遅れて作曲が間に合わない時は、収録中古関自ら即興で Hammond オルガンを弾いたという。

## 4 オリンピックに関連する作品

ここまで、ラジオ放送に関連する古関の音楽を見てきたが、最後に東京五輪・札幌五輪開会式のために作曲された音楽を取り上げる。

1964 の東京五輪で、古関は組織委員会からの依頼により〈オリンピック・マーチ〉(東京オリンピック行進曲)を作曲した。この作品の高い評判により、古関は”日本のマーチ王”と称賛される。とりわけオリンピック・マーチは古関自身、一世一代の作として精魂込めて作曲した、と後に振り返っている<sup>2</sup>。また、東京五輪に続き、1971 年〈純白の大地〉(札幌冬季オリンピックの歌)、〈スケーター・ワルツ〉(札幌オリンピック開会式)も作曲をしている。

<sup>2</sup> 齋藤秀隆『古関裕而物語 昭和音楽史上に燦然と輝く作曲家』、pp172-174。

古関が作曲するにあたり、組織委員会の方から、「日本的なものを」というような要求があったが、雅楽風、民謡風にするのではなく、国際的に普遍性のある曲にするために、「日本人が悠久の歴史における労働と生活のなかで生み出したリズムと情緒を西洋音楽に咀嚼・血肉化」<sup>3</sup>した、と評される。

## 5 古関裕而の作風とその特徴

以上、ラジオとオリンピックの作品を中心に古関の作風とその背景を紹介してきたが、いくつかの作品を見る中で共通の特徴が見られることがわかる。

まず当時の時代背景として、ラジオが娯楽、情報収集手段の中心であることから、一般の人々の耳に入りやすく、聞く頻度も高い、日常の中にある音楽であることが前提となっている。さらに、古関の作品はシンプルで覚えやすく、親しみやすいメロディーとなっていることが聞くだけでも明白であると思われる。また、古関自身の音楽的基盤として、西洋音楽を基礎としながら、民謡的な五音音階も使うなど、日本人の民族性も織り交ぜた作風を意識していた傾向がある。そのような作風となったのは、古関が幼少期のころの音楽体験、身の回りの音楽環境によるものだろう。以上のような点から、日本人にとっても自然であり、なじみやすい作品として広く受け入れられていたのではないかと考えられる。

## 6 古関裕而の再評価

以上のように古関の作品のなかでもラジオ、オリンピック音楽に焦点をあて、そのうちのごく一部を見てきた。このような古関裕而の功績は、近年、古関の故郷福島市内でアピールする動きが見られる。とくに福島市では、生誕 100 年などと結び付けて、まちづくりや観光を通して福島市をアピールするために古関の功績を再評価し持ち出す傾向が近年見られるようになっている。そうした主な例を、以下に挙げる。

福島市内にある古関裕而記念館は、1988 年、福島市制 80 周年記念事業の一環として設立する。先述した〈とんがり帽子〉をイメージした屋根となっている。記念室には古関が作曲する際に 35 年間使っていた書斎のモデルや、先述した NHK で実際に愛用していたハモンドオルガンなどが展示される。



古関が NHK で実際に使用していたハモンドオルガン  
(於古関裕而記念館・撮影増田)

<sup>3</sup> 菊池清麿『評伝古関裕而 国民音楽樹立への途』、p219。

1991 年には、古関裕而氏の偉業を記念し、永くその功績を後世に伝えるとともに、福島市から全国への文化の発信をめざし、「ふるさと創生事業」として福島市古関裕而記念音楽祭始まった。2007 年には川崎市のホール「ミューザ川崎」との連携にも手掛け、同様のコンセプトを掲げた音楽祭が開催されている。

2009 年には、JR 福島駅前広場に記念モニュメントが建てられる。このモニュメントからは、朝 8 時から夜 8 時まで 1 時間ごとに〈栄冠は君に輝く〉などの曲が流れる。



古関裕而生誕 100 周年記念モニュメント  
(於 JR 福島駅前広場・撮影増田)

2020 年には、古関裕而と妻の金子（きんこ）夫妻をモデルとした朝の連続テレビ小説《エール》<sup>4</sup>の放映が決定している。福島市は、福島商工会議所青年部などと「古関裕而・金子夫妻 NHK 朝の連続テレビ小説実現協議会」を立ち上げ、福島市出身で唯一の名誉市民である作曲家・古関裕而氏とその妻・金子氏を主人公とした NHK 朝の連続テレビ小説を、東京オリンピック・パラリンピック競技大会が開催される 2020 年の前期に放映してもらえるように、金子の故郷である愛知県豊橋市と共同で、さまざまな取組みを行ってきた。《エール》は、その念願かなっての作品となる。

そのほか、今年 9 月より、福島市役所本庁舎の電話保留音が〈栄冠は君に輝く〉に変更されたというニュースもある。同市役所の保留音はこれまではバッハのメヌエットだった。選曲の理由について、木幡浩市長は「今年の甲子園も熱く、古関メロディーの中でも親しまれている」ためだと語る<sup>5</sup>。また、東京五輪の来年は〈オリンピック・マーチ〉などを庁舎内の BGM にすることも検討しているという。

このように、古関は福島の人々の誇りとなっていることがわかる。また、震災復興、観光などで惹きつけるために古関を持ち出している姿勢が伺える。ほかに並列されるような歴史や文化財がないのも、「利用」される理由の一つであると考えられる。以上のような昨今の状況から、古関が再評価されている様子がうかがえると考えられるだろう。

<sup>4</sup> 古関裕而役は俳優の窪田正孝、金子役は二階堂ふみ。

<sup>5</sup> 朝日新聞デジタル「「栄冠は君に輝く」福島市役所保留音に」  
<https://www.asahi.com/articles/ASM8Y3QY9M8YUGTB001.html>

## 7 まとめと今後の課題

最後に、まとめと今後の課題を述べる。

まず、古関が作曲した曲をみていくことで、特徴としてシンプルで明快、短くキャッチーなフレーズをうまく使用しているということが考えられる。このことは人々が親しみやすく、覚えやすいということにもつながるのではないかと考える。

また、「国民的作曲家」と言われるようになった背景には、戦前戦後における政府、GHQ といった上からの指令があった。例えば、先述した《鐘の鳴る丘》も、もともと CIE から 15 分というアメリカと同じ条件を突きつけられ、菊田が断ったが、最終的に命令に従わざるを得ず・・・という過去がある。そうした要求を古関は汲み取り、柔軟に対応して作品として作っていた。古関がそれに応えようと尽力した結果生まれた作品に影響力があり、大衆にも受け入れられ、広く愛されるものとなったと考える。

また、現在古関裕而の音楽が出身地である福島市で再評価され、古関を通じた福島市アピールが行われていることから、作品が「大衆的」であるがために音楽が一人歩きし、古関裕而という人物があまり知られていなかった状況からそうしたことも含めて一般の人々に知られる契機となっていると考える。

今回は古関の手がけた作品のほんの一部を見たにすぎないが、今後の課題として、映画音楽や歌謡曲、戦時歌謡も視野に入れ、古関の作品の「大衆性」「国民的作曲家」としての要素を、作曲背景とともに探っていくことが必要である。とくに戦時歌謡に言われるが、歌によって民衆の一致団結を図るために非常に影響力のある歌も数多く出していたことから、音楽における「大衆性」がそうした国民の団結力の増幅にも影響を及ぼしているのではないかと考えられる。そうして他のジャンルもみていくことによって、古関裕而の作品における特色を浮き彫りにさせることができるのではないだろうか。

(博士課程 2 年 音楽教育)

## 参考文献

古関 裕而

1997 『古関裕而 鐘よ鳴り響け』(東京：日本図書センター)。

齋藤 秀隆

2000 『古関裕而物語 昭和音楽史上に燦然と輝く作曲家』(東京：歴史春秋出版)。

齋藤 秀隆

2010 『古関裕而うた物語』(会津若松：歴史春秋出版)。

菊池 清麿

2012 『評伝古関裕而 国民音楽樹立への途』(東京：彩流社)。

長田 暁二

2017 「誰か歌を想わざる 日本の作曲家物語 古関裕而(1)誰もが口ずさんだ隠れた名曲の数々」『マンスリーウイル』152, 318-321.

2017 「誰か歌を想わざる 日本の作曲家物語 古関裕而(2)日本人の心を揺さぶった鎮魂歌(レクイエム)」『マンスリーウイル』153, 308-311.

雑誌：

「ハモンドオルガンの知識」音楽の友 10(12)、112-116、1952 年.

「企画特集/福島市制 100 周年プレ記念事業 川崎・宮古・福島 3 市長交流会 3 市長がふるさと「花もみもある福島市」の魅力を大いに語る--来年は川崎市でも「古関裕而記念音楽祭」を開催」財界ふくしま 35(12)、124-127、2006 年.

「古関裕而生誕 100 年記念特別座談会 本物の音楽都市・福島を全国に発信」財界ふくしま 38(10)、98-105、2009 年.

「日本のマーチ王 古関裕而生誕 110 年」財界ふくしま 48(2)、4-6、2019 年.

「メロディー" 展示"による記憶の想起と生産 : 福島市古関裕而記念館」JunCture : 超域的日本文化研究 (10)、221-224、2019 年.

ホームページ :

古関裕而記念館 <http://www.kosekiyuji-kinenkan.jp/> (12 月 11 日アクセス)

福島民友「東京五輪にエール 古関裕而夫妻・朝ドラ化「活気が満ちるはず」

<http://www.minyu-net.com/news/news/FM20190301-355578.php> (7 月 1 日アクセス<sup>6</sup>)

福島市名誉市民第一号 作曲家古関裕而氏の紹介 (12 月 11 日アクセス)

<http://www.city.fukushima.fukushima.jp/bunka-shinkou/kanko/bunka/shisetsu/1998.html>

朝日新聞デジタル「「栄冠は君に輝く」福島市役所保留音に」

<https://www.asahi.com/articles/ASM8Y3QY9M8YUGTB001.html> (12 月 11 日アクセス)

---

<sup>6</sup> 現在はページが削除されており見られなくなっている。